

## ピウスツキと北方諸民族文化の研究 : B. ピウスツキのオロッコ語文法記述について

著者	津曲 敏郎
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	005
ページ	283-294
発行年	1987-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00003762">http://doi.org/10.15021/00003762</a>

## B. ピウスツキのオロッコ語文法記述について

津 曲 敏 郎\*

### は じ め に

B. ピウスツキの未刊資料の中にはツングース語に関するものとしてオロッコ語（ウイльта語）の文法・テキスト・語彙と、オルチャ語のテキスト・語彙とがあり、いずれも最近 ICRAP プロジェクトの一環として A. F. マイエヴィチによるタイプ原稿化とポーランド語の英訳が行なわれ、利用しやすい形となった。ここではその中から特にオロッコ語の文法記述をとりあげ、内容の紹介と検討を試みたい。

ピウスツキのオロッコ語資料は1904年のサハリンでの実地調査に基づいており、オロッコ語研究史上早い時期に属する点で貴重である。特に文法記述としては、1912—13年の調査による中目覚のもの [中目 1917; NAKANOME 1928] に先行しており、不完全ながらも最初のオロッコ語文法ということが出来る。ポーランド語による記述のほか、ほぼ同じ内容のロシア語版があるが、両者の前後関係を記述そのものからにわかには判断することはできない。いずれの記述にも多かれ少なかれ未整理な点が目につく。ポーランド語版（以下「ポ版」と略）には“Gramatyczne uwagi o języku Oroków” (=Grammatical remarks concerning the language of Orok) の表題がある。本文の頁数は原資料のコピーだけからでは不明確な点もあるが、ポ版は27頁（あるいは25頁？ 後述参照）、露版（=ロシア語版）は24頁（ともに一頁あたりおおよそ15行前後）という短いものである。はじめに音についての概略があり、続いてオロッコ語とオルチャ語の差異に関する所見が述べられたあと、品詞別に形態論的概略が行なわれている。統語論に関しては各品詞論の中で断片的にふれられる以外、とりたてて論じられてはいない。

以下では、主としてポ版の記述にそって内容をかいつまんで紹介し、今日知られているオロッコ語（主として池上 [1980, 1985] による語形をくゝ内に入れて示す；潤瀉 [1981] による語形は特に M を付す）との比較検討を行ないたい。以下、各節の番号および一部のタイトルは筆者が便宜的に付したものである。

---

\* 北海道大学文学部 本館共同研究員

## 記述の概要とその検討

### 1. 音 論

はじめに次のような形で音の一覧が示される（原資料では大文字；「 」内はピウスツキ自身の注記による）：

a, b, c, ċ, d, e 「語頭まれ」、ę 「e と y の中間」、f 「語頭まれ、u の前のみ」、g, h, x 「喉音」、i, j, k, k̄ 「喉音」、l 「語頭まれ」、ł, m, n, ŋ, o, p, r 「まれ、語頭は外来語のみ」、s, ś 「ロシア語外来語のみ」、t, u, y, v 「まれ」、z, ʒ 「dz」、u 「dź, まれ」、w 「英語の w」。

これらのうち、c と ċ は /č/, z と ʒ と u は /j/, l と ł は /l/, f と h と x は /x/, k と k̄ は /k/ にそれぞれ該当する。このように同一音素に対する過度の音声的区別がみられるが（もっとも u, ł, k̄ などで表記された例はきわめてまれである）、たとえば前三者などは明らかにポーランド語の影響によるものであろう。すなわちそれぞれポーランド語字母の c—ć, z—ź—ż および l—ł の区別に対応している。ę は実際の表記例が見当たらないが、他の母音音素の異音と思われる。y はやはりポーランド語字母を反映する表記で（ロシア語 ы に対応）、/ə/ に該当する。w に対する注記も、ポーランド語の w [v, f] を念頭においたものであろう。ただし /w/ に対してはむしろ v の表記がめだつ。

この一覧以外にも実際の記述中では子音字の上または右肩に ' の符号をつけて口蓋化した異音が示されることがある。ただし n' で示されたものの一部は /ɲ/ に該当する。また母音音素 /ə/ を表わす特定の字母を欠いており、u または o, まれに y と混用されている。もっともこの点では今日のソ連人研究者による表記 [Петрова 1967; Цинциус и др. 1975, 1977] も同様である [cf. 津曲 1980]。

### 2. オルチャ語とオロッコ語の差異に関する注記

はじめにも述べたようにピウスツキは、ツングース語としてはオロッコ語のほかに、それときわめて近い関係にあるオルチャ語の調査・記述も行っており、両者の類似と相違に注意が向くのは当然ともいえる。以下6か条にわたって述べられる所見は、しかしながら、文法そのものに関するものではなく、はじめの4つは音に関する問題、残り2つは語の借用に関する問題である。なお以下の引用は必ずしも忠実な訳ではなく、ポ版・露版両者の内容を汲んだものである。語例中オロッコ語は Ok, オルチャ

語は Ol と略して示す。

- 1) オロッコ語はオルチャ語より h を多用する。これはギリヤーク語の影響と思われる：

例：《暑い》 Ol. pykuli Ok. hykuli <xəkkuuli>  
《アイヌ人》 Ol. kui Ok. kui, kuhl <kuuji>  
《盗人》 Ol. čovo Ok. čoho

少なくとも今日の両言語をみる限り、/x/ の頻度に関して特に大きな相違があるとは言えないし、そこにギリヤーク語の影響があったかどうかも定かではない。ただしピウスツキの表記する母音間の h のうちあるものについては、今日より前の古い形を反映している可能性のあることが指摘されている [Ikegami 1985]。第二例についてギリヤーク語 кууи 《同》 [Савельева и Таксами 1970] 参照。第三例については、潤濁 [1981] に cōko 《鉤》という語があり、その動詞形 cōkolo- が《ひっかける》のほか《盗む》の意を有しているのが注意される。

- 2) オロッコ語にはオルチャ語（およびギリヤーク語—露版のみ）より子音群が多い：

例：《アムール川》 Ol. Mangu Ok. Mangbu <maŋbu オルチャ人>  
《悪い》 Ol. ork'e Ok. oršk'e <orki>

両言語は音節構造上差異はなく、語頭・語末に子音群は立たず語中の子音連続もふつう二つまでであり、それも特にオロッコ語の方が頻度が高いということはない。例では一見オロッコ語が三つの子音連続をもつかのようであるが、音韻的には < > 内に示したようにやはり二子音の連続と解釈される。後者は k の前で無声化した r が š のような響きを伴うのを忠実に写したものである。なお露版ではギリヤーク語も引合いに出されているが、子音群に関していえばむしろギリヤーク語の方がはるかに豊富といえよう。

- 3) オロッコ語は b を避ける：

例：《ひげ》 Ol. budakta Ok. gudakta <id.>

これも一般的な傾向としては認めがたく、たまたま上の例でそのような対応関係がみられるにすぎないと思われる。しかしこれに関連して、オロッコ語に gumasikka 《お金》という語があり（ただしピウスツキの資料では bumaška として現われる）、ロシア語 бумажка 《紙幣》の借用語とされている [Цинцигс и др. 1975] のが想起される。その点では検討に値する興味深い指摘といえよう。

- 4) アクセント（露版では“ударение”）はオルチャ語では末尾音節、オロッコ

語ではそれより前におかれる：

例：《金持の》	Ol. bajá	Ok. bája <bája>
《金》	Ol. aisi	Ok. ájsi <áisi>
《釘》	Ol. tukpá	Ok. túkpy <túkpe>
《少女》	Ol. patalá	Ok. patála <patála>
《火をつけろ》	Ol. ivanú	Ok. ivánu <iwánu>
《貧しい》	Ol. d'obí	Ok. ʋóbbi <ʋóbbée>
《紙》	Ol. xausalí	Ok. xáusal <xausáli>
《かわうそ》	Ol. mudú	Ok. múdua <mœdúgə>

これは基本的に正しい、しかも重要な指摘であるといえる。オルチャ語のアクセントが一般に末尾音節にあることは後に P. Schmidt [1923] や T. И. Перлова [1936] も認めるところである。オロッコ語については、一般にうしろから二番目のモーラ（そこが音節主音でないときはその前の音節主音のモーラ）に高さの山がある [津曲 1983]。ピウスツキはすでにこのような一般化に近づいており、彼のオロッコ語資料全般におよぶアクセント表記もこの一般化にかなりよく添うものであるということができる [cf. Tsumagari 1985a]。上例（例数を大幅に減らし、順番も入れかえた）にもその一端はうかがえよう。ただし最後の三例のように、特に重子音の前や二重母音・長母音を含む音節などにアクセントを誤記した例も少なくない。

5) オロッコ語には少なからずギリヤーク語 (=Gl) からの借用語がある：

例：《くさい》	Ol. vaksi	Ok. noxk'e <M. ɲokkē>	Gl. noxondra
《波》	Ol. vata	Ok. lata <laata>	Gl. larš
《板》	Ol. xoldokso	Ok. kalumur <kalumuri>	Gl. kalimyrš

第一例・第二例のオロッコ語については語形の相違や他のツングース諸語との共通性などからみて、必ずしもギリヤーク語からの借用語とは断定できない。その点第三例はツングース諸語中、オロッコ語だけが有する語であり、形も似ていることから、ギリヤーク語起源とみてよかろう。

6) オロッコ語には少なからずロシア語からの借用語がある：

例：《散弾》	Ol. sasa	Ok. drob <doroopu>
《頭布》	Ol. punku	Ok. blāto <bilaatu>

それぞれロシア語 *дроб*, *платок* からの借用であるが、今日われわれに知られている形よりむしろ原語に近い形をしている。ただし厳密にいうと第二例は語頭音からみて、ロシア語から直接入ったものかどうか疑問がある。たとえば語頭に p をもたない

ヤクト語に入った形が他のツングース語を介して流入してきた可能性もある [cf. Цинциус и др. 1975]。いずれにせよオロッコ語にロシア語起源の単語があるのは事実であるが、オルチャ語と比べて多寡を論ずるのはそう簡単なことではない。しかし両言語にじかに接したピウスツキの経験から出たことばである以上、上述の他の所見ともども、当時の言語状況に対する数少ない証言として耳を傾けるべきであろう。

なおポ版ではこれらの記述に続いて、露版にはない二頁分の短い記述がある。内容は音に関する注記のようであるが、前後のつながりもなく、走り書きに近いものであり、そのうえ用いられている紙も他と異なるらしいことなどからみて、本来この位置にあるべきものかどうか疑わしい。

### 3. 文法的注記

#### 3.1 名詞

##### 1) 性

はじめに性の(形態的)区別はないことが述べられ、動物の性別を区別する際には *xus'e* <*xusə* 男>—*ykty* <*əəktə* 女> または *amina* <*id.* 雄>—*yniny* <*əninə* 雌> が前置されることがいくつかの例と共に示される。さらに動物によっては特別の形をもつものがあるとして、三組の例をあげる：*ninda* 《(雄) 犬》<*ninda* 犬 (一般)>—*ivyci* 《雌犬》<*iwəčə*>, *haxta ula* 《雄トナカイ》<*xakta* (*ulaa*)>—*nami ula* 《雌トナカイ》<*nami* (*ulaa*)>, *ahi sipy* 《雄の黒貂》<*M. ai šəpə* 牡の貂 (古語)>—*uery sipy* 《雌の黒貂》<?>。

##### 2) 複数

この項の記述はあまり整理されていないが、名詞はそのままの形で複数を表わしうること (*uilta* 《ウイльта人 (単・複)》<*id.*>, *inyni* 《日》—*tunda inyni* 《5日》<*tunda inəŋi*>), 名詞によっては特別の複数形があること (*putty* 《子供》<*puttə*>—複 *puril*~*puryl* <*puril*>) が正しく指摘されている。しかし人称形とあわせて論じられているための混乱などもあって、一般的な複数接尾辞 <-1~sal> を明確に分析するには至っていないようである：*ulinga ula* 《良いトナカイ》<*ulinga ulaa*>—複 *ulinga mali ula* <-mali は「～だけ、ばかり」を意味する複数とは別の語尾>—*mini ulalbi* 《私のトナカイ (複)》<*mini ulaa-l-bi*>。

##### 3) 格変化

ここではあげられている格の種類・順序からみて、ポーランド語の格体系をあてはめたものであることが明白である。

①生格：「特別な形はなく、関係する語の前に立つ」とされる：*mini agbi ulani* 《私の兄のトナカイ》〈*min-i aag-bi ulaa-ni*〉, *duxu ydyini* 《家の主人》〈*duxu ədə-ni*〉。実際には上の〈*min-i* 私の〉のように1・2人称代名詞にのみ属格形の存在が認められ、一般には後続する被限定語が先行語に一致した人称語尾（動物や物の場合は3単-*ni*）をとることによって限定・所属関係が表わされるが、そのような形での言明はない。

②与格：ここであげられているのは実際には方向格《～の方へ》の例ばかりであり、本来の与格は後述の「前置格」の一つとして現われる。ポーランド語やロシア語の「与格」的意味にあたるのはむしろこの方向格であるから、この格がとりあげられること自体は問題ないが、難をいえばふつうの形〈-*tai*〉と再帰人称形〈-*takki* 自分の～へ〉とが区別なく列挙されている：*ula-taj*～*ula-takki* 《トナカイへ》〈*ulaa-tai* トナカイへ, *ulaa-takki* 自分のトナカイへ〉。なお *buju* 《熊》〈*bəjə*〉の「複数与格」としてあげられている *bujunul-tekki* 〈*bəjə-ŋu-l-təkki* 自分の熊(複)へ〉には、「譲渡可能」な所有関係を表わす接尾辞〈-*ŋu*〉を見出すことができる。この接尾辞に関する言及は彼の文法記述中には見出されないが、今日の調査でもたとえば〈*ulaa* トナカイ〉のような家畜にはこの接尾辞は付かず（上の“*ula-takki*”参照）、野生動物には付くことが確認されている。

③対格：語尾 -*ba*, -*va*, -*vo* によって表わすとされている：*saŋna* 《タバコ》—*saŋ-namba* 《タバコを》〈*id.*〉, *mu-vo* 《水を》〈*məə-wə*〉。実際には対格語尾は語幹の形によって融合することがあるが（たとえば〈*utə* 《戸口》+*bə*→*uttə* 《戸口を》〉のように）、それについてはふれられていない。

④造格（道具格）：語尾 -*zi* によるとされる：*kucihenzi* 《ナイフで》〈*kučigən-ji*〉, *ʒ'olozɪ* 《石で》〈*jolo-ji*〉。

⑤前置格：ここではオロッコ語の種々の位置関係を表わす格が並べられている。これらはポーランド語やロシア語ではおおむね前置詞（+前置格）によって示されるため「前置格」のもとに一括されたものである（ただし「前置格」という呼称は露版にのみみえる）：*na-du* 《地面に》〈*naa-du* 与格〉, *Onor-du* 《オノル（地名）から》〈*Onor-duu* 奪格〉, *namu-la* 《海に》〈*id.* 場所格〉, *ugda uv'ek'eni* 《舟を通して》〈*ugda uwwee-kkee-ni* 舟の上を通過して；沿格〉。

⑥呼格：名詞によっては短縮された形が（呼格のように）使われるとして次の例をあげる：*mamác'a* 《老婆》〈*M. mamāca*〉—*mamá* 《婆さん！》〈*mama* 老婆〉。しかしながら呼びかけは一般にイントネーションによって示されるのであり（上例のアク

セント符号参照), 必ずしも語形の短縮を伴うわけではないし, ましてそれを格の一つとみなすことは適切ではない。

### 3.2 形容詞

形容詞に関してまず, 常に名詞に先行すること, 派生形容詞と非派生形容詞があること, 名詞の(自然)性による区別のないことが例と共に述べられる。次に形容詞の「複数形語尾」として *-mali* があげられているが, 上にも述べたように(本稿 3.1: 2)参照), 語尾の意味に対する誤解がある: *mini ulalbi sagzisal mali isivaci* 《私の年とったトナカイ(複)が来た》*<mini ulaa-l-bi sagji-sal-mali isu-xa-či>*→私のトナカイ(複)は年寄り(複)だけ戻って来た)。ここでは複数を表わしているのは *-mali* ではなく *-sal* であり, しかもその語幹は名詞化されているとみるべきである。

さらに比較表現について, 「比較級」は語尾 *-duma*, 「最上級」は小詞 *zin* (*M. zin* 非常に, 一番)の前置によることが述べられる。このようなとらえ方はたとえば Петрова [1967] にもみえるが, 特に *<-duma>* については本来《〜の方》を表わす語尾であり, 比較表現に必須の要素ではない。むしろ形容詞はそのままの形でも, 比較の対象《〜より》が道具格 *<-ji>* で示されることにより比較表現が成りたつのであるが, 残念ながらそのことを示すような説明も例文もない。

### 3.3 代名詞

ここではまず 1・2・3 人称代名詞の主格形・与格形(実際には方向格形)・対格形が一覧表の形で示される。3 人称としてあげられているのは(「与格形」を除き)指示代名詞であるが, これはむしろオロッコ語の実状に則している。「所有代名詞」として *sini ʒ'esi* 《君の仲間》*<sini jee-si>* のような例があがっているが, すでに名詞複数形の項で一覧しているため, とりあげ方も断片的であるうえ, *sini ʒ'esi asisi* 《君の仲間の妻》*<→sini jee-si asi-mi>* のような誤りもみられる。

疑問代名詞として *xaj~haj* *<xai 何>*, *ɲuj* *<ɲui 誰>* が例文の形で示される。特に後者が動物を指しえない点でポーランド語 *kto* (およびロシア語 *кто*) と異なることにも注意が向けられている: *xaj sindaxaniha?* 「動物について」*<xai sinda-xa-ni-ga 何が来たか>*—*ɲuj sindaxaniha?* 「人間について」*<ɲui sinda-xa-ni-ga 誰が来たか>* (ポーランド語ではどちらも *kto* で訳されるため「」内の注記がある)。

他に不定代名詞 *xajvada* *<xai-wa-ddaa 何も, 何か(対格)>*, *ɲujvydy* *<ɲui-wə-ddəə 誰も, 誰か(対格)>*, および指示代名詞 *yri* *<əri これ, この>* などがあげられている。

### 3.4 数詞



最初に「人，犬，魚，貂——一般に動物——も物も同じ数え方をする」とある。ことさらにこのような注記をする背景には、おそらくギリヤーク語で対象によって数詞の形が異なることが念頭にあったものと思われる。続いて列挙される基数詞は、表記上の細かな異同を除けば、今日知られている形とよく一致する。ただし大きな数では、*agduma tumy* 《十万》〈→*joon tumə* ; *aagduma* は《兄の方，年長》の意〉，*urut* 《百万》〈?〉のような特異な形もみえる。

回数詞として〈*geedara* 1回，*døere* 2回，*ilaalta* 3回，*jiiltə* 4回……〉に該当する形があげられているが、いずれも後に *byltaj* という、強調のための、本来不必要な語を伴っている〈*bultai* 一所懸命，大いに；cf. *geedara bultai* 一遍に，急に〉。

### 3.5 動詞

動詞の活用は語幹に種々の動詞語尾が付くことによって行なわれるが、活用語尾の豊富さに加えて人称変化もあり、また語尾によっては語幹との融合などもあるため、かなり複雑である。ピウスツキの記述も動詞に関しては、おおむね個々の動詞ごとに短い文例とその訳を未整理のまま列挙するにとどまっており、分析的・体系的であるとはいえないし、いくつかの誤りも含まれている。ここではあらかじめ活用形をその機能により、1) 文末形、2) 副動詞形、3) 形動詞形に分けて、それぞれに該当する形を彼の文例中から適宜拾うことにしたい。

#### 1) 文末形

①現在形：例としてたとえば *vary-* 〈*waa-ri-* 獲る〉，*depçi* 〈*dəpçi-* 食べる〉等の人称変化形があげられる。このうち2単の形とされている *varu*，*deptu* は実際には命令形である 〈*waa-ru* 獲れ，*dəptu* 食べろ；2単は *waa-ri-si*，*dəpçi-si*〉。また1複・2複でそれぞれ *vāpu*，*vas'u* (露版では *bācy*) とあるのは、過去形 〈*waa-xa-pu* 私達が獲った，*waa-xa-su* 君達が獲った (-*xa* の子音は弱い有声摩擦音となることがある)〉を誤ってここに入れたものと思われる (現在形は 〈*waa-ri-pu*，*waa-ri-su*〉)。3複の形も本来なら 〈*waa-ri-či* 彼らが獲る〉であるが，*vac'ēci* とある〈おそらく，*waa-jiččee-či* 彼らが獲るつもりだ〉。

②過去形：*doromoci-* 〈*doromo-či-* 盗んだ〉，*aoxa-* 〈*au-xa-* 眠った〉等の例が見出される。ここでもたとえば《彼は眠った》の訳に対して、現在形 *aorini* 〈*au-ri-ni* 彼は眠る；過去形なら *au-xa-ni*〉をあげるような混同がみられる。

③命令形：上述の2単現在形と誤ってあげられたもののほか、たとえば *ulusu* 〈*ele-su* 煮ろ〉，*tyry* 〈*təə-ru* 坐れ〉等が命令形としてあげられている。なお2複現在形は勧誘の意をもつことがあるが、その例として *akpanzīs'u* 《寝よう》〈*akpanji-su*〉，

saɣnamba ummis'u 《タバコを吸おう》〈saɣnam-ba ummi-su〉などもみえる。

④否定形：否定動詞現在形として、ysivi buru 〈ə-si-wi bəə-re 私は与えない〉のような例もみえるが、yzi- とした例も多い：yziwi depte 〈ə-si-wi dəptə 私は食べない〉。ちなみに yzi depcivi 《私は食べない》という形も並記されているが、このような言い方は少なくとも今日のオロッコ語では一般的ではない。過去形の例としては、ycimbi doromosi 〈əččim-bi doromo-si 私は盗まなかった〉等。「禁止」の表現として yzi doromosi 《盗むな》〈əjje doromo-si〉等。さらに否定副詞の使用例もみえる：ycili itymi 〈əččeeli ittəə-mi 私はまだ見てない〉。

## 2) 副動詞形

完了副動詞の複数形 〈-gaččeeri ～してから〉の例がいくつか見出される：is'uxatciri 〈isu-gaččeeri 帰ってから〉、xoziha-c'eri 〈xoji-gaččeeri 終わってから〉、dyp-tuje-c'eri 〈dəptu-gəččeeri 食べてから〉。このように語尾の頭子音 g の表記はまちまちだが、むしろ実際の発音に忠実であるともみられる [cf. IKEGAMI 1985b]。ただし tyry-ciri 《起きてから》とあるのは 〈təə-gəččeeri〉の何らかの誤りであろう。また is'uxat-ciri dyrukpixymbi 《私は帰って休んだ》は、本来なら単数形 -gačči が期待される場所である 〈isu-gačči dərukpi-xəm-bi〉。

副動詞の例としては他に不完了条件形 〈-rai ～するなら（語幹との融合でかなり形が変わる）〉の例がみられるのみである：tugdnyi ysi pu gynny 《雨が降れば私達は行かない》〈tugdəəji-ni ə-si-pu ɣənnəə〉、ysi hyni tugdy gynny 《雨が降らなければ私達は行く》〈→əsi-ni tugdəə ɣənnəe-pu〉。

## 3) 形動詞

文末形としてとりあげた、現在 〈-ri～-si〉、過去 〈-xa～-či〉等では実際には形動詞語尾であり、名詞を修飾することもできるが、その使用例はあがっていない。わずかに ulupula s'undata 〈ələ-pulə suɣdatta 煮えた魚〉、pusiktu zili 〈pusi-ktu jili 刈った頭〉のような形を拾うことができる。また形動詞が与格語尾をとって副動詞的に用いられた例として、ysi itecidupu mo tuxyni 《今、君達は（露版では「私達は」）木が倒れたのを見た》〈əsi itəčči-du-pu moo tuu-xə-ni→今、私達が見ているときに木が倒れた〉。

## 3.6 副詞

疑問副詞として、xōni 《どのように》〈xooni〉、xajdu 《どこに》〈xaidu〉、xali 《いつ》〈xaali〉などと並んで、sado 《どこに》〈M. sadu〉、xajbu 《なぜ》〈? cf. xaimi なぜ〉、xoty 《どこへ》〈?〉、nuulu 《どこへ》〈?〉のような形もあがっている。場

所に関する副詞 (jedu 《ここ》〈jədu〉, čado 《あそこ》〈čadu〉, to-tadu 《むこう》〈tootodu〉, ta-tari 《ずっとむこう》〈taatari〉), 数量に関する副詞 (oi 《少し》〈id.〉, bara 《たくさん》〈id.〉, xasu 《いくつ》〈id.〉) がこれに続く。他に xamarepi 《うしろに》〈xamarree-pi 自分のうしろを〉, attandali 《背後で》〈attan-dulli 自分の背後で〉) のような名詞の再帰格語尾形, pos' 《通して》〈M. pos 貫いて, 一気に〉および i 《はい》〈ii〉, ana 《いいえ》〈anaa〉 のような間投詞的な語もあげられている。

### 3.7 接続詞

並列的な接続詞に類するものとして ky 《と, も》を分析している: si ky bi ky 《君も私も》〈siikkəə biikkəə〉。従属接続詞にあたるものはないが, かわりに完了の条件副動詞 〈-pee ~したら〉を含む例文をあげている: xalidda Onor-la ysiup'e xuda-sipu bo 《オノルに来たとき, 私達は買おう》〈xaaliddaa Onor-lo isu-pee xudassipu buu いくつかオノルに戻ったら, 私達は商いをしよう (～売ろう)〉。

### 3.8 間投詞

最後に「間投詞」として (ただしこのタイトルおよび前節の「接続詞」のタイトルは露版のみ), 犬やトナカイへのかけ声の例が示されている: k̄aj-k̄aj 〈M. k̄ai k̄ai 道を曲がれ (犬ぞりの先導犬に対する命令)〉, čök-čök-čök 〈M. cök cök トナカイを呼び寄せる叫び声〉。このような語が正しく記録され, しかも後の資料からもその伝承が確認される意義は大きい。

疑問文の文末詞 -ha, -j 《～か?》〈-ga (疑問詞と共に); -i~-ji (Yes-No 疑問文に)〉もここで示されている: ŋuj ulani-ha 《誰のトナカイか?》〈ŋui ulaa-ni-ga〉, si xujs'esi bara-j 《君の食料は多いか?》〈sii xuisə-si bara-i〉。

## お わ り に

以上簡単にみてきたところから了解されるように, ピウスツキの記述は決してオロコ語の文法的事実を十分な分析のもとに体系的に網羅したものとはいえない。むしろ随所に母語の枠組を先行させて, それにあてはまる形を未分析のまま羅列した感を否めない。しかしながら, この記述が今世紀初頭という早い時期に短期間の調査で, しかも大量の語彙とテキストの採集をも伴って行なわれたことを考慮すれば, 彼が卓越したフィールド・ワーカーであったことは明白であり, その分析はむしろわれわれに残された課題というべきであろう。その意味でこの文法記述もまた, 彼の残した他の多くの業績と共に, さらに綿密な再評価がなされてしかるべきである。本稿はそ

の不完全な試みにすぎないが、その中にも、今日的な目で見えた欠点を補って余りある評価すべき点の少なくないことを示しえたと思われる。

\* 本稿は、1984年12月15日大阪・国立民族学博物館で行なわれたピウスツキ総合科学研究会での口頭発表に手を加えたものである。基礎資料として A. F. マイエヴィチ教授による原資料からのタイプ原稿とポーランド語の英訳を利用させていただいたことに対し、同教授に感謝する。ただし本稿での引用にあたっては原資料のコピーによって確認を行なった。したがって引用上の誤りはすべて筆者に帰する。口頭発表の際はオロッコ語の引用は露版のロシア字つづりによったが、本稿ではポ版のローマ字表記を用いた。ただしアクセント符号は特に必要でない限り省略した。オロッコ語の分析にあたっては、池上二良先生の著述【特に IKEGAMI 1956, 1959】に負うところがきわめて大きい。また同先生には口頭発表の際の配布資料をご覧いただき、いくつかの貴重など指摘を賜わった。あわせて心から謝意を表したい。さらに露版の記述の一部について灰谷慶三先生からご教示を得たことを記して謝意を表す。なおピウスツキの未刊資料の概要について MAJEWICZ [1985a], ツングース語資料については IKEGAMI [1985], 特にオロッコ語語彙をとりあげたものとして Tsumagari [1985a] をそれぞれ参照されたい。またオロッコ語の文法概略として Tsumagari [1985b] もあわせて参照されたい。さらに露版の文法記述とテキストのタイプ原稿が MAJEWICZ [1985b] として刊行されたことを付記する。

## 文 献

池上二良

1980 『ウイльта語基礎語彙』（ウイльта族言語文化調査研究報告2），札幌：北海道大学文学部言語学研究室。

1985 『ウイльта民俗語彙』（ウイльта民俗文化財緊急調査報告書7），札幌：北海道教育委員会。

IKEGAMI, J.

1956 The Substantive Inflection of Orok. 『言語研究』30: 77-96.

1959 The Verb Inflection of Orok. 『国語研究』9: 34-79.

1985 B. Pilsudski in Uilta and Olcha Studies. *Proceedings of the International Symposium on B. Pilsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, Hokkaido University: 168-172.

潤瀧久治

1981 『ウイльта語辞典』網走：網走市北方民俗文化保存協会。

MAJEWICZ, A. F.

1985a Vicissitudes of B. Pilsudski's Lexicological Collections. *Proceedings* (See IKEGAMI 1985b): 173-183.

1985b *Materials for the Study of the Orok (Uilta) Language and Folklore I: Фонетические и грамматические замечания к языку ороков, орокские тексты* (Working Papers 16, Institute of Linguistics, Adam Mickiewicz University). Poznań.

中目 覚

1917 『オロッコ文典』東京。

NAKANOME, A.

1928 *Grammatik der Orokko-Sprache*. Osaka.

SCHMIDT, P.

1923 The Language of the Olchas. *Acta Universitatis Latviensis* 8, Riga: 229-288.

津曲敏郎

- 1980 「『ツングース・満州諸語比較辞典』のウイлта語単語の検討」『ウイлта族言語文化調査研究報告』1, 札幌:北海道大学文学部言語学研究室:11-25。  
 1983 「ウイлта語のアクセント」『アジア・アフリカ文法研究』12:75-84。

TSUMAGARI, T.

- 1985a On B. Pilsudski's Orok Vocabulary. *Proceedings* (See ИКЕГАМИ 1985b): 184-189.  
 1985b Grammatical Outline of Uilta. 『アジア・アフリカ文法研究』14: 1-15.

ПЕТРОВА, Т. И.

- 1936 *Ульчский диалект нанайского языка*. Москва-Ленинград.  
 1967 *Язык ороков (ульта)*. Ленинград.

САВЕЛЬЕВА, В. Н. и Ч. М. ТАКСАМИ

- 1970 *Нивхско-русский словарь*. Москва.

Цинциус, В. И. и др.

- 1975, 1977 *Сравнительный словарь тунгусо-маньчжурских языков* том I, II. Ленинград.